

お四国遍路みちの女良寛

歩き遍路の果てに堂守となった尼層の捨身

人生は路上にあり

「^{たらい}盥から たらいにかわる 夢の内」

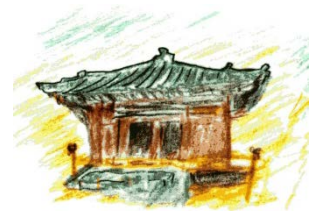
と江戸期の川柳にいうように、どうせ裸で生まれ裸で死ぬつかの間の一生だと思えば、気持ちは楽である。

しかし、人生八十年の今日、道半ばの四十代はそんな自嘲やあきらめの境地にまだなじめないのが本当であろう。ただ、諸事万般、できるだけとらわれを捨てるのが賢明だと気づく年代である。そうしないと身が持ちそうにない。

願わくば、一切を放下した^{むげ}無碍の境地が理想だが、その入り口はまだまだ遠い。

現代の四十代とは、このような年頃なのだろうか。四国の田舎に住む私が不惑半ばを越え、遍路行に関心を抱くようになったのも自然のなりゆきかもしれない。

話は一昨年（平成五年）の秋にさかのぼる。ふと一日だけの歩き遍路を思い立った私は「お四国参り」に詳しい知人にコースを相談した。私が住む伊予松山にも四十六番の浄瑠璃寺から五十三番の円明寺まで八つの札所が点在している。その内の四か寺ほど歩いてみるつもりだった。ところが、知人が勧めてくれたのは、松山から峠を越えて瀬戸内海に面した北条という町に至るコースだった。北条の北辺の山裾に鎌大師堂というお堂があるので、そこを訪ねてみてはどうかという。



鎌大師には、昭和五十四年の暮れに熱海からやってきた老女が棲みついている。お遍路のなれの果てだと自称するその堂守は、十数回も女ひとりで歩き遍路を行じ、^{てづかみようけん} 齢七十を越えて遍路みちの堂守になった。名前を手束妙絹といい、地元の人たちから「女良寛さん」と呼ばれ親しまれている。北条出身の劇作家である早坂暁も帰省の度に手束を訪ね、歓談していく。早坂が脚本を書き NHK

で放送されたテレビドラマ『花へんろ』も早坂の口利きで鎌大師をロケ地にしたいきさつがある、と知人は教えてくれた。

興のわいた私は、三十キロ余りの山道を七時間かけて歩き鎌大師堂に隣接する草庵の前に立った。現われたのは作務衣^{きむえ}姿の有髪の尼僧である。八十も半ばだと歳をかかされていたが、膚の色艶もよくとてもそんな高齢には見えなかった。

尼僧はやわらかな眼差しで運動靴を履いた私の足元を見、すぐ畳の間へ招いてくれた。私は無遠慮に足を投げ出し、脛をさすりながら尼僧のたてたお茶を味わった。

手束は私が歩いてきたことをしきりに誉める。歩いて回らないとお遍路の心はわからないのだという。私は誉め言葉に甘えて、すっかりいい気分になった。が、手束はいかにも落ち着かない様子である。時折、窓の外のマツの樹影に目を移す。聞くと、それは全国の名松百選にも入った樹齢六百年ほどの大師松と呼ばれるクロマツだった。大師松は手束が齢六十を越えて始めた遍路行の心の支えであったのだという。そこで、私は四国を一人で十五回も歩いて回ったという手束の体験を聞かせて欲しいと申し出た。

「遍路行は擬死再生の旅」ともいう。歩き遍路は、千五百キロの道程をおよそ四十日かけて巡る。ひとり歩きの手束は、行き倒れも覚悟し、白菊会に入って歩き始めている。思えば還暦を越えたひとり身の女が、なお死んだ気で何度も捨てようとしたものは何だったのか。私が聞いたかったのはそのことであつた。ところが、この問いかけに返ってきたのは、私のような者はどこにでもありますから、という手束の素っ気ない言葉だった。それに、いまは時間がないのだという。東京のある出版社から本を出すように依頼され、四六時中原稿を書いている。来春には書きあげるから、それ以降なら時間ができる。しかし待てないのなら、毎朝五時過ぎにお堂で勤行をしているから、その後しばらくなら話をしてもよいというのである。私は試されている気がしたが、勤めを言い訳に早朝の勤行の誘いには応ぜず、本が出たら読みます、と申し訳のようにいい、大師堂を後にした。



手束妙絹著『堂守日記 花へんろ一番札所から』（佼成出版社）が松山の書店にも並ぶようになったのは、それから半年余り後の今年の五月のことである。積み上げられた中から一冊買い求め、私はさっそく目を通した。「まえがき」に、早坂暁の序文がある。「魂の救済所を持つ日本列島は幸せである。ただ私の町に札所がないのが、なんとも淋しく不満でもあった。それが手束さんがわが町の大師堂の庵主さんになられたと聞き、素晴らしい札所が出来たとよろこんでいる。『花へんろ一番札所』と私は勝手に名付けることにした」。

これは、昭和六十年に手束が地元の出版社から随筆集『堂守歳時記』を出したとき、早坂が寄せた序文のさわりを再掲したものだと言った後、「まえがき」の中で鎌大師堂を訪れる様々な人たちの哀歓を寸描し、大師堂がいま名実ともに「花へんろ一番札所」になったと書いている。手束妙絹の名は「お遍路さん」の間はもとより、一部の識者たちに知れ渡っていたのである。

『花へんろ一番札所から』は、手束の来し方を四季折々の花鳥風月に託してさらりと織りこんだ随筆集であるが、読み進むにつれ、私は手束のやさしさやあたたかさにもまして、彼女の生き方の烈しさや厳しさに胸をつかれる思いになった。私は早朝の勤行の誘いを断った自分の不明を恥じ、手束が堂守になってから書き綴^{つづ}ってきた本を読んでみた。処女本は堂守になって三年後の昭和五十七年に出した『風の足あと——尼僧の遍歴』で、これには劇作家でかつて手束と小学生の同級生だったという飯沢匡が「手束さんが、よもや庵主さんになるとは思わなかった」などとユーモラスな序文を書いている。本の内容は手束が昭和三十五年の五月から一年余り西パキスタンで暮らした日々の随想と、遍路行の二部構成である。この中で、「ものの虚しさを知ったとき、み仏が手をさしのべて下さったのです」と遍路行のきっかけを述べた言葉が私の関心をひいた。遍路行を綴った『人生は路上にあり』（昭和六十一年）、さらに『お遍路でめぐりあった人々』（昭和六十三年）と読み進めた私は、「捨身の充実」を貫こうとする手束の生き方に魅かれた。そこには捨て切る人生の豊かさがある。私はほぼ一年ぶりに鎌大師堂を再訪し、手束の赦しを得て、早朝の勤行に参じることになった。



やっとなつかんだ熱海の暮らし

手束妙絹（本名・絹子）は明治四十二年、八人兄姉妹び五番目として北海道砂川市に生まれた。父の謙吾は静岡県庵原郡興津（現在の清水市）出身で、東京商業学校（現・一橋大学）を卒業し三井物産に勤務する商社員だった。八人の子を産み育てた母の春枝は漢学者を父にもち、長野で育った。上京し共立女学校で学んだ後、結婚。春枝は形にはまらない人柄で、何をするのも子供と一緒にになって楽しむ母親だったという。兄姉妹はみんな勉強好きで、二人の兄は一高から帝大へ進学している。手束は幼少期、父の転勤で台湾で過ごした後、小学校入学を機に東京市へ帰ってきた。

十歳の春、八人の子を残して母が死んだ。最も女手が必要な時だったが、四十を越え男盛りだった父は、後妻もめとらずひとりを通して生きた。この父のいさぎよい生き方は手束に強い影響を与える。彼女は三輪田女学校を卒業し、東京市立牛込女学校高等専修科に進み、卒業して間もない昭和五年の春、父の勧めで名古屋の老舗の商家に嫁ぐ。

夫になった男は根っからの商人だった。利にさとく、口がたくみで儲け話には節操がない。女の扱いも同様だった。夫の人柄がすぐいやになった。別れようと決心したとき、子供が腹にいた。手束は、好きになれない男の子種でさえも宿し、好悪の気持ちとは別に産みたい思いが日毎につのる女の性を呪った。悩んだ末、彼女は出産後母としてだけ生き、夫婦生活を断った。夫が強く出れば家を出る覚悟だったが、夫は世間体を取り、しだいに執着を示さなくなった。手束は、傍目には裕福な商家の奥様役を演じ、心ひそかに別れを言い出す機会を待ったのである。

昭和十八年秋、その夫が召集され戦場に赴いた。年が明けて、名古屋に建物疎開令が出たのを機に手束は婚家の反対を押し切って家を出、三河の山村の農家に身を寄せた。蚕室の土間に莫塵を敷き、十三歳になった息子と寝泊りした。食べるために、近郊の県立推進農場で働いた。満州へ送り込む農業青年隊や大陸花嫁を養成する農場の炊事婦である。仕事は苛酷だったが、子供と生きる無我夢中の毎日は仕合せだった。

戦争が終わると、夫が蚕室へ迎えにきた。が、手束には元の生活へ戻る気持

ちはまったくなかった。争いになり、夫はどうしても別れたいのなら子供を手放せ、と殺し文句で手束を追い詰めた。将来を思い、手束は因果を含めて子供と別れ、天理教の修養寮へ身を隠した。女はもとより母親として生きることも捨て、ついにひとり身になった。齡三十五の秋のことである。

ほとぼりが冷め、三河にもどってみると、県立農場は戦後も残され、百余名の若い男女が寮生活をしていた。手束はかつての蚕室から再び炊事婦として通う生活を始めた。何も考えず、動物のように働き、植物のように眠った。一時も気をゆるせば、身も世もない淋しく空虚な思いが襲ってくる。時間が空くと、蚕室の裸電球の下で農林省の生活改良普及員の資格を取るために勉強を始めた。農山村の僻地へ県から貸与されるみどりの自転車に乗って出かけ、僻地の人たちと手を取り合って生きていこうという夢を描いた。が、試験に合格したものの、いくら練習しても自転車に乗ることができず、夢は実現できなかった。

後にパキスタンで暮らすことになった手束は、自転車に乗れなかった口惜しさからか、幌馬車が好きになり、外出の時はよく御者に頼んで手綱を握らせてもらい、「アップレエ、アップレエ（どけ、どけ）」と声を張り上げ、御者に笑われたものだという。

実家の方から京都へ行かないか、とそれとなく話ができるようになった。妻に先立たれたさる日本画家が、身の回りの世話をする女性を探しているという。再婚話ならまったくその気はないと断ったが、家事をみるだけでよいからぜひ来てほしいとたつての願いである。行くと、二条城の隣の申し分のない屋敷だった。何代にもわたる日本画家の家系で、先代が南禅寺に描いた天井画は国宝に指定されていた。

毎朝早く、二条城の庭園を画家の散歩のお供をする。初冬の御所の玉砂利の上一面に、山茶花がうす紅の花びらをこぼしている。踏んで歩くのはいとおしく何度も立ち止まった。画家はそんな手束に執心した。手束にとって画家は敬慕する人であった。が、それ以上のことは考えられなかった。早朝の散歩は二年間続き、手束は京都を去った。



昭和三十五年、岡崎市にある紡績工場の女子従業員寄宿舎の寮母をしていた手束に思いがけない話があった。西パキスタンのカラチへ、ハウスマネージャーとして赴任しないかという。現地の半官半民の工場で働いている日本人技術者が生活様式のちがいから心身ともにダウンしかけており、かれらの日常生活全般の相談役を依頼されたのである。

四月、羽田から空路二十八時間かけてカラチへ到着した。この炎熱の国で手束は一年半暮らした。職業はもとより人間にまで厳しい階級のある社会だった。様々な人たちと知り合い、人間や人生への思いをいっそう深めていく。彼女は好んで沙漠へ出かけた。来る日も来る日も青いパンジャブの空は、暮れてもなおその青さが失せない間に、月が昇る。血のように赤い月を眺めながら手束は物思いにかられるのだった。

帰国後、しばらくして横浜へ転居した。横浜駅西口近くのアパートに住みながら、小さな電機工場へ働きにでた。五十も半ば過ぎ、手に何の職もない。女工たちと一緒にあって、言われた仕事は何でもした。疲れた身体で、黒く澱んだ運河沿いの下駄履き住宅のアパートへ帰ってくる。窓から顔を出すと暗い水面にぼっと自分の顔が映る。低所得者のアパートで、どこの部屋からか節分の豆まきの声が聞こえたりすると、さすがに寂しさが堪えた。

昭和四十年、手束は勤めをやめ二十五年間の貯えで、熱海の中銀にある野中山マンションの一室を買った。近在の寮や旅館へお茶と華道の出稽古に出かけ、食べ料にした。稽古のない日は、栓をひねれば温泉の出る浴槽で、松籟しょうらいに耳を傾けながら「極楽、極楽」と口癖のようにつぶやく。やっとなつかんだ何不自由ない暮らしが始まった。が、傍目に満ち足りた生活は長続きしなかった。

めぐり会った人びと

南国とはいえ、冬の明け方は寒さが厳しい。

年末から年始にかけて二週間、私は毎朝夜明け前の暗がりについて鎌大師堂へ通ったが、その間にも、境内に野宿する遍路を見かけた。手束に会うために鎌大師堂へやってきた人たちである。中には、気がふれた娘連れの五十年配の夫婦がいた。手押し車の横の簡易テントの中で、着ぶくれした三人は抱き合うように休んでいた。また、改造したワゴン車を宿代わりに、もう何回もお四国

を回っているという不動産屋の元社長もいた。月三十八万円ある年金から八万円だけ自分が取り、残りは大阪に置いてきた妻子へ送っているのだという。一見のどかな四国の空も、その空の向こうを見つめる様々な境涯の人たちが遍路みちを旅しているのである。

手束の場合も熱海にいた十数年間、毎年春の訪れとともに四国へ渡り、蜜柑の花の匂う初夏までお四国の空を歩いていた。熱海の生活は遍路行のためにあるようなもので、彼女は仏教の勉強も始め、遍路を始めて二年後に永平寺で得度し在家の尼僧となった。

その手束がお四国遍路みちの堂守になって、十五年の歳月が流れている。その間、多くの人たちが鎌大師堂を訪れ、手束がお点前した茶を飲み、語り、時には共に涙し、再会を誓って別れていった。手束にとって、どの人たちもみんな愛しく忘れられない人たちである。しかし中でも、東京から手束を訪ねてきたある医師のことは、いつまでも彼女の胸の奥に深く刻まれているという。その医師との出会いは、まさに二人の人生が響き合う一期一会だったという。

それは、昭和六十年十二月のことである。

夜、浜野と名乗る相手から不意の電話があった。明日お会いしたいのだが、と尼僧の都合をきいた。お遍路のことで教えて欲しいことがあるという。わざわざ自分のような者に聞かなくても、と思ったが聞けば、熱海の鈴木さんから手束のことを教わったのだという。浜野は鈴木さん一家と以前から家族ぐるみの付き合いがあり、野中山のマンションへ何度か行ったこともあるというのだった。鈴木さんというのは、終戦時に首相だった鈴木貫太郎の娘で手束がいたマンションに家族で住んでいた。手束とは俳句や茶の仲間として親交がある。縁を感じた手束は山茶花を玄関に活け、遠方からの客を待った。



浜野は、朝一番の飛行機でやってきた。空港からタクシーをとばしたという。かれは境内の大師松を見上げながら、まるで自分が走ってきたかのように肩で息をついた。尼僧は遠来の客を草庵の六畳の間へ通し、石油ストーブを燃やして部屋を暖めた。対座し、差し出された名刺に目を通した。医学博士と記され

た肩書きと並んで病院の名前がある。顔を上げると、病院の方はこの春から出ていません、と客はいった。

「ずっと働きっぱなしでしたから、一線から退いてしばらくのんびりするつもりでした」

そんな歳には見えなかった。が、話からすれば還暦は越えているのだろうか。家庭人としては、決して誉められる人間ではなかった、とかれは話を続けた。

永いこと家庭をかえりみなかった罪滅ぼしに、妻を連れ車で春の大和路を回った。飛鳥の寺跡や石碑台を訪ね、斑鳩の里は車を置いて、サイクリングを楽しんだ。それから妻の念願だった薬師寺の花会式に参加した。その最後の日の夜、鬼追式を心奪われたように見入る妻の華やいだ顔を目のあたりにし、夫もこれまで味わったことのない充足感に包まれたのだった。旅立つ前までは、時に初老の影さえ感じさせた妻が、新妻のように若返り、少女のような声をあげて夫の腕を取るのである。かれは妻が見せた女のいじらしさを無性に愛しく感じたという。

「女はみんなそうですよ」と尼僧は相づちをうった。

女を捨てて生きて身の上だけれども、もし父の謙吾のような男が現われたら、自分だって抑圧してきた女を再び輝かすかもしれないのだ。

こんなに喜ぶのなら、と夫は予定を延ばし京都へ行くことにした。が、これが運命の別れ道になった。京都に入って間もなく、かれの運転する車は道から転落した。会話に気を取られ、つい脇見をしたのが原因の自損事故だった。

病院のベッドで意識を回復した夫は、妻の死を知らされる。せめてあの世へ旅立つ妻の顔を見てやりたかったが、かれ自身、身動きもできない重傷だった。ベッドの上で、窓から妻を乗せた寝台車が斎場へ向かうのを見送り、「おれもすぐに行くから、待ってろ」と声をかけた。

それから半年余りが経つ。生き延びた浜野は、死んだ妻が不憫でならない。うつうつと悲嘆にくれる日々を重ねていたところ、鈴木夫人が一冊の本を浜野に勧めた。かつて、手束が鈴木へ贈った『風の足あと』である。浜野はさすがの思いで一尼僧が書き綴った随想を読んだ。そこには、名誉や富に執着して生きて自分とは対極の人生がさらりと描かれている。「放てば、満つ」というが、手

束の生き方はまさに捨てることで深まってきた人生であり、そこが、知った

かぶりの知識人や宗教家とちがうところである。その手束が遍路行には捨身の充実があるという。浜野はそのことを直接手束に会って聞いたかったのである。



浜野の話が一段落すると、尼僧は茶をたてて勧めた。障子の隙間から風が入ってくる。境内の大師松がその風を切って鳴いた。

浜野は白湯^{きゆ}を所望し、それを静かに飲み干すと聞いた。

「遍路に出れば、気持ちが楽になりますか」

「ええ、どんなノイローゼでも治ります」

「自分を捨て、死んだ妻とこの四国を歩いてみたい。そしたら妻もこの私を少しは赦してくれると思う」

明日にでも遍路に出たい、と医師は瞳を上げた。手束は男の純情に心打たれる思いがあった。まるで少年に還ったみたいに浜野の心は洗われているのだった。

「あなたは捨身の姿を私に求めておられるが、私はお遍路も尼も半端者です」と、手束はいった。偽りのない自分の姿を相手に伝えたかったのである。彼女は続けた。熱海の華やいだ生活を捨てて、この地の堂守になったのは遍路行のなれの果てとはいえ、前の堂守だった行戒という僧の言葉が引きがねになっている。

行戒は妻子を捨て、甲府から風呂敷包み一つでお堂に移り住んだ世捨て人だった。自分は山頭火と同じだとうそぶき、俳句をよくした。遍路行で鎌大師堂を訪ねる度に、手束はこの四国の空のどこかに自分ひとりをおいてくれるお堂がないものか、と行戒へ頼んだものである。その都度、「あんたに、すべてが捨てられるか」と、行戒は手束をためすようにいばかりだった。

時が流れ、病を得て養老院へ入った行戒は、集落の自治会へ手束を次の堂守として紹介した。手束には意地もあった。行戒の言葉に応えて、一切を処分し茶道具だけ持って四国へ渡った。が、手束は自治会の出した条件の低さにたじろいでしまった。堂守の収入は、堂守手当の年八万円と灯明料の一万円だけで

ある。貧しさは厭^{いと}わないが、月一万円にも満たない収入で、どうやってくらせばよいのか。手束は月三万円ほどの老齢年金を食料にあてた。ところが、暮らし始めるとよくしたもので、食べ物は村人のお供え物のお下がりですら十分間に合う。それに新聞代を払うくらいのお賽銭がある。さらに、お茶や花を習いたいと近在の村人が弟子になった。半端に捨てた身が、村人のおかげで切実に生かされている、と手束は心底思うのだった。

「あるところではなく、ないところにこそある」というが、まさにその通りなのである。野山をひとり歩く遍路行も、こうした意味で現代社会を生きる人々が見失った心を取り戻す旅でもある。

「ひとり歩いてお遍路をすると、自分と自然が一体となった喜びがあります。自分がうれしいと山も空も道端の草もみんなうれしい。自分が悲しいと一木一草までが悲しい。そんな時、自分も野山の草花も生きとし生けるものみんな仏なのだという思いがあるのです」

お遍路は捨てる旅であり、まためぐり会う旅でもある。捨て切って生死一如の境地に至った時、人は新たな自分と出会うのだ、と手束は医師に語った。ないところにこそ、あるものがある。たとえば貧しい人や悲しめる人ほど心あたったかく、お遍路に心尽くしのお接待をしてくれる。それは手束が十数回重ねた遍路行で得た実感でもあった。パキスタンでも彼女は同じような体験をしている。パキスタンの土語であるウルドゥ語を習って渡航した手束は、現地の下層の人たちと交流した。彼女が一日接する人々は、ボーイ、郵便夫、鉄の便壺を洗う汚物処理人、水汲み人夫、それにコックなどだった。かれらの中には最下級の者もいたが、弱く貧しい人々ほどそれなりの諦観をもって素直に生きていることに感銘すら覚えたのだった。

手束は話を続けた。

「尼僧の身でありながら、仏教とはとか、仏とはと聞かれても私には何も答えられない。国宝の仏像も野の地蔵も私には等しく仏であり、仏教なのです。仏は人を越えるものではなく、人の中にあって三世を生きる真の心のようなものだと思うのです」

「遍路に出れば、仏に出会えますか」

「ええ、もちろん出会えますとも」と手束は応え、ただ冬の遍路行は大変であ

るから、春まで待つようにと医師を改めて諫めたのだった。

それから、尼僧は遠来の客を伴ってお堂に上がり、経をあげた。再び草庵に戻り、昼を一緒にした。午後、尼僧は訊ねられるままに遍路行でめぐりあった人々の話をした。浜野は彼女の話にじっと耳を傾けていたという。

帰りの飛行機の時間が迫ってきた。浜野は草庵の小さな本棚から謡曲の本を取り出した。それは父の謙吾が大事にしていたものである。妻と一緒によくこれを謡いました、と開けた頁は『江口』だった。平家没落後、難波の江の口へ乳母を頼って逃げてきた平資盛の娘がこの地で遊女になり、四天王寺詣でのときに江の口へ立ち寄った西行と一夜語り明かしたという話である。本棚の横に置いてあった仏像に向かい、浜野は謡いだした。謡いなれた味のある声だった。目を瞑り、耳を傾けると、手束の脳裏を謙吾の姿がかけめぐった。謡い終わると、浜野は頬の涙を手でぬぐい、はにかむように微笑した。

浜野は帰り際に、年が明けたらすぐ一番札所の靈山寺から打ち始めるといった。春まで待てないという。尼僧は医師の背後の大師松を見上げた。ふと浮かんだ高浜虚子の句が胸をついた。「道のべに阿波の遍路の墓あはれ」。

伊予北条の地で幼年時代を過ごした虚子が、遍路松のかたわらの無縁塚を詠んだ句である。かつて遍路みちに聳える松は、生まれ変わろうと願う歩き遍路の道標であったが、その松の根元で行き倒れる遍路もいたのである。

手束は心配だから、遍路行のおりおり電話か手紙をくれるようにと、初めて遍路へ出る人に約束を取り付けた。

年が明け、手束は浜野からの便りを愉しみに待っていた。が、いつまで待っても音信は届かなかった。

歳月は慈悲

鎌大師堂をいつも様々な人々が訪れる。

宿を借りようとお堂に立ち寄る者や、大師松の下にテントを張らせて欲しいという学生遍路もいる。三日前に刑務所を出たばかりだと凄む男にも寝床を用

意し、朝一汁一菜をわけあうと、別人のようになり、故郷に帰ってやり直すのだと神妙な顔でお堂を後にするのである。泣きに来る人には一緒に泣いてあげ、涙で互いの心を洗って送り出す。手束にとってどんなお接待もその一つ一つが修行なのである。

週に一度、精神発達遅滞児の更生施設へお茶のお稽古に出かける。稽古がすむと、大人の体格の子供たちが、庵主さまの肩を叩くのを楽しむ。ある日、何を思ったのか、その中の一人が庵主の髪を強く引っ張った。驚いてふり払い、叱責しようとするふり返ると、困惑し目に涙をいっぱいためた顔があった。もっとやさしく叩いてね、といいきかせながら、「どの人もみな、ひと懐かしいのだ」と手束は思うのだった。

早朝の勤行を終えて、大師松の落葉を熊手でカリカリとかき集めるのが手束にとって一番楽しいひとときである。松と心を通わせてると、良寛の好きな句が浮かぶ。「焚くほどは風のもてくる落葉かな」。

平成六年になって、夏の訪れとともにその大師松が枯れ始めた。異常な^{かんぼつ}早魃で樹勢が弱っていたのでマツクイ虫にやられたのである。何とかならないものか、手束は心を痛めたが、頼みの樹医もすでに手当のしようがないという。枯れきってしまったといううちに伐採することになり、全国から集まった木材業者が入札し、樹齢六百年といわれる巨木に五百七十万円の値がついた。

伐採が始まる前の日、手束は大師堂を離れ、静岡の身内の家で過ごした。二週間後に帰庵した尼僧の目には、ただ茫々と漲るように青く張りつめた秋の空があるばかりであった。

二か月が過ぎた冬至の夕暮れ、手束は集めていた大師松の落葉で風呂を沸かした。大師松の樹影がかき消えた窓を眺めて身体を湯に浸す。すると、ちぎれ雲がゆくように、積み重ねた歳月の思い出が脳裏をよぎっていった。長い道程をよくぞここまで歩いてきたものよ、という感慨があった。人生の路上で多くの哀歓にめぐりあった。それは真のようでもあり夢のようにも感じられる。ふと、句が浮かんだ。

歳月は慈悲とぞ柚子湯に顎をうめ

ところでこの春、私は手束から遍路に旅立った医師のその後の消息を聞いた。

便りを待ちこがれていたその年の早春、手束の元へ鈴木夫人から浜野の死を報^{しら}

せる封書が届いた。

阿波から土佐へと冬のお四国を巡り歩いた浜野は、足摺岬にある三十八番札所の金剛福寺から岬の灯台に至る椿並木の小道に倒れていたのである。死因は心臓麻痺であった。

「人は相会うために生まれ、別れるために生まれる」

捨て切る人生を豊かに実らせてきた手束妙絹が、十年前の初冬、鎌大師堂を去りゆく浜野の背に合掌し、念じた言葉である。

